

果樹シンクイムシ類の新しいフェロモントラップ調査法

◆シンクイムシ類について

ナシヒメシンクイ、モモシンクイガなどシンクイムシ類は、幼虫がナシやリンゴ、モモなどの果実に食入して商品価値を著しく低下させます。

発生調査の方法としてはフェロモントラップが簡便で有効ですが、近年は防除のために性フェロモン剤（交信攪乱剤）を使用する園地が増えたことにより、園地内にフェロモントラップを設置する従来の方法では調査が困難になっています。

そこで、これらの害虫を対象としたフェロモントラップ調査の新しい方法についてご紹介します。



ナシヒメシンクイ成虫

◆ナシヒメシンクイの調査 <サクラにフェロモントラップを設置>

ナシヒメシンクイは、関東以南の地域ではサクラにも寄生することが知られています。

これを利用し、園地付近のサクラ並木にフェロモントラップを設置する方法が有効であることが明らかになっています（杉浦ら 2013～2015、中野ら 2013、井原ら 2014～2015）。

しかし、本種は北日本ではサクラに寄生しない地域もあることが分かっており（佐々木ら 2013）、本県における適用性を検討する必要があります。

そこで、金沢市才田においてナシ園内とサクラ並木にトラップを設置して比較したところ、サクラ並木でも誘殺が可能であり、ナシ園内と発生時期・消長が一致することを確認できました（図）。

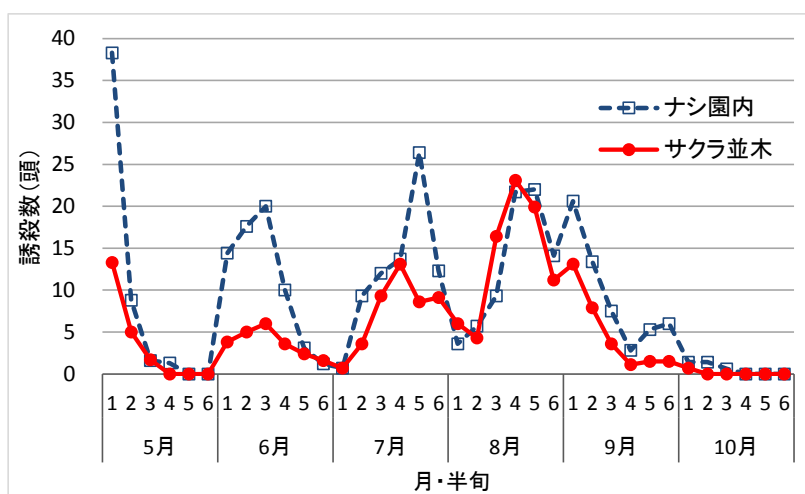


図 ナシヒメシンクイのフェロモントラップ誘殺数の設置場所による比較（2015年、金沢市才田・農林総合研究センター所内）

◆モモシンクイガの調査

モモシンクイガについては、多発条件下では、交信攪乱剤を設置した園から5～10m離れた位置に複数のトラップを設置することで、発生初発時期を調べることが可能です。ただし、少発生の場合やトラップ数が少ない場合には、十分な誘殺数が得られず調査は困難です（柳沼 2013～2014、井原ら 2015）。

なお、当害虫は台湾向け生果実などの輸出検疫の対象となっているため、もしも、台湾に輸出することになれば、産地には発生調査や防除の徹底が求められます。